

泉鏡花「酸漿」論：「人種改良学」との関わりに於いて

中西，由紀子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/15991>

出版情報：Comparatio. 5, pp.40-49, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



泉鏡花「酸漿」論

——「人種改良学」との関わりに於いて——

中西由紀子

一 「酸漿」は、鏡花の作中、これまで触れられることの少なかった作品の一つである。と言つて、今までに論じられていないから、ここで論じておく必要があるなどと言うつもりではない。論じるべきか否かは、それに足る問題が提起されるか否かにかかっているだろう。今回「酸漿」を取り上げるのは、それが泉鏡花という作家の作品を眺める際、新たな視点を提示してくれる作品であると同時に、明治末年という同時代的文脈を形成する雰囲気の一部が結晶化されている作品でもあると考えるからである。

ところで、「酸漿」に言及した文章はかなり少ないのだが、そうした研究状況の中『日本幻想文学全景』において本作が取り上げられているのは異例のことと言わねばならない。作品が取り上げられること自体、再評価の契機になり得るが、取りあえず、評価の内容を確認しておこう。曰く、「酸漿を鳴らす醜怪な老婆を目撃してから酸漿の幻に憑かれ、血を吐いて死ぬ女を描いて生理的恐怖描写を極めた」^一 作品、であると。

同書では鏡花の作品をいくつかの系列に分類、紹介しており、「酸漿」は「星女郎」^二、「尼ヶ紅」^三などと共に「神経症的時代精神を反映した異常心理・幻覚小説」にカテゴライズされる。先の紹介文を踏まえれば、強迫神経症的な心性を持った女の物語、とでも言えようか。ただ、作品に対するこうした語り方で気をつけておきたいのは、「神経症」という診断を下すことで後の問いを封じ込めてしまうことである。——「神経症者」の「幻覚」——、そういった整理だけに終わるのではあまり意味が無い。問題はそれを私たち（ここで言う「私たち」はテクストを読む「私たち」）であり、所謂「健常者」としての「私たち」ではない。「健常者」として読むことは診断を下すことと変わらないがどう作品と関わっていけるか、ということである。

そういうわけで、この「神経症的幻覚小説」と私たちはどう関わって
いけるか、いよいよその試みにのりだそう。

二

何故、酸漿（以後「」付きは作品を、それ以外は普通名詞としての酸漿を指す）なのか、それが問題だ。

答えへのプロセスとしてまず、ほぼ同時期に執筆されたと思しい「朱日記」^五が参考になる。「朱日記」はその題名からも知れるように氾濫する「赤」のイメージで覆われた作品になっており、「酸漿」とも重ね合わせれば、鏡花が当時、「赤」に侵食されていく世界を描くことに執心していたと考えられる。しかしながら、そこに留まっていたのでは酸漿も茱萸も「赤」を表示するものの一つに過ぎなくなる。そうではなく、やはり「酸漿」では酸漿が、「朱日記」では茱萸が選択されたのであり、そこには何らかの必然性（作家が意識しているようにまいと）が考えられてしかるべきだろう。では、「酸漿」において酸漿が選択されることの必然性とは何か。それを考えるにあたって、まずは酸漿がどういったものとして了解されるかについて確認しておく。

昨今は、酸漿を鳴らす子供にも滅多と出会わないが、明治期、それは日常的な光景だったようである。平山鏗二郎は明治三五年、以下のように記している。

酸漿を鳴らすことは少女は素より一般婦人に盛に行はる。酸漿売ありて日々市中を売り廻れり^六。

この後、平山は玩具の製造も西洋化して磁石、振子、ゴム、螺旋、ブリキなどを使用したものが増えたことを伝える。作中、「老婆」が口にしていたという「ゴム酸漿」は、植物の酸漿が破れやすいことより代用品としてゴムを使用したものであるが、おそらく玩具製造のこうした流れの中で生産されたものの一つと考えられる。作中敢えて、植物ではなくゴムの酸漿が採用されたのは、老婆が「電車」という空間の中で目撃される^七ことよりも当面は同時代性の摂取として考えられるだろう^八。

さて、酸漿は以上の如き子供の玩具としての微笑ましいイメージの他に別の民俗的側面も持っている。例えば、霊魂が宿る植物として仏前に供えられる、であるとか、蛇の瞳の色に比せられる^九、とかである。が、

特に本論で問題にしていきたいのは、墮胎の術としての酸漿である^{二〇}。

民俗的墮胎法において「もつとも直接的で効果があるとされるのは、陰部に異物を挿入する方法である。挿入する物体として、ほおずきの根がしばしば用いられ」るほか、薬物による墮胎法でも「ほおずきの根」が煎じて飲まれていたと言う^{二一}。この場合重要なのは、こういった方法が実際のところいつ頃まで用いられていたのか、ということよりも寧ろ酸漿に纏わる情報としてそうした墮胎のイメージが形成される、ということの方である。前記の如き情報、知識を持つ読者に訴える形で酸漿という選択は機能する。余談ながら、酸漿と墮胎の関係を考えるとき、酸漿を喝らすのが子供と「一般婦人」であったことは如何にも因縁めいて感じられ、単に微笑ましい光景とは映らなくなるが、それはさておき、作品へ戻ろう。

一読すれば直ちに分かるが「酸漿」という作品中、墮胎という問題は、現象としては顕在しない。しかし、酸漿という選択以外にも、喉に詰まった（と思い込んでいる）酸漿を箸で突くという小銀の死に方はその隠喩として受け取れる。ところで、箸で突いて死ぬ、というこの発想の源泉は所謂「箸墓伝説」に求められよう。

おもしろいのか

やまとことひももそひめ

箸墓伝説とは、大物主神の妻、倭迹迹日百襲姫が昼間現れない夫へ、その姿を明かしてくれるよう頼んだところ、夫が実は小さな蛇だったことに驚くという話で、肝心の「箸墓」に繋がる部分は以下のように語られる。

時二大神恥玉テ忽チ二人ノ形ニナリ玉フ。其妻ニ謂テ曰ク「汝忍ビズシテ吾ニ差ミセツ。吾還リテ汝ニ差ミシム。」仍テ大虚ヲ踐ムデ御諸山ニ登マス。爰ニ倭迹迹日百襲姫仰ギ見之ヲ悔テ急居。則チ箸ヲシテ陰ヲ撞イテ薨ヌ。乃チ大市ニ葬シ奉ル。故ニ時ノ人其墓ヲ號テ謂フ箸ノ墓ナリト^{二二}。（傍線は引用者。ここでは便宜上『国史大系』中「日本書紀」に拠り、句点、括弧、送り仮名等適宜補いながら書き下し文とした。）

ここで「撞」かれるのは「陰」だが、表象の次元において「口」がそれと置換可能であることは精神分析的言及を待つまでもないだろう。そして、尖った物で「陰」を衝くのは最も「直接的な」墮胎の術だったはずだ。ここでもまた「墮胎」のイメージを想起するのは牽強附会か。

但し、ここで確認しておきたいのは、論者が何もここで「酸漿」という作品を「判じ物」として読んでその謎解きをしようとしているのではないことだ。判じ物とはつまり、「酸漿」という作品は一見分かり辛いのが、実は墮胎のイメージを表象したものだ、と謎解きすること。それはそうだと思うが、細部をパズルのように組み合わせる作品をそのように解き明かすことが本論の目的なのではない。それではどういうところに向かって読んでいきたいのかと言え、例えば「酸漿」に落ちる箸墓伝説の影を単なる発想の典拠として見ないような方向性。具体的には、「酸漿」自体が、「神話的表象」になっているのではないか、ということである。

ここで言う「神話的表象」とは、漠然と共有されている（いそうな）イメージを言語化し、物語化して語ることを示す。具体的に言えば、「天岩戸」神話でも「国譲り」神話でも何でも良いが、そういった物語はある「歴史的な出来事」（それは客観的に記述することも語ることとも不可能だし、そういうものとして「在る」わけでもない）に対して人々が持っていたイメージを言葉にして語り継いできたものと言える。勿論、その際には目に見える形でも見えない形でも権力関係が働いていて様々な圧力がかかっているはずだ（例えば、国つ神が天つ神に国を「譲る」のは物語が編纂されていく中で働いた最も顕著な権力関係を示すと言える）。こういった言語・物語化の仕方を「神話的表象」と呼ぶとすれば、「酸漿」ではそれがなされているのではないかと考えるのである。では、どういった「歴史的出来事」がとらえられ、酸漿即ち墮胎のイメージへと結びついているのか。

三

ユーゼニツクス

曩に吾人の屢バ論述したる人種改良学の研究ハ、欧州諸国に於て近來益々盛んに行はるゝと共に、其応用をも見るに至り、今日に於てハ既に多少の成績を挙げたるものすらあり

人種改良学ハ結婚及び出産を制限せんとする点に於て宗教上の動機より之に反対するもの少なからず、又人権を侵害するものとして之を非難するものもあるも、各国貧民の増加と、之に伴ふ虚弱者の激増とハ、各国の競争上其識者をして甚しく危惧の念を生ぜしむるに至り（略）

以上は「人種改良学の応用」と題する明治四四年一月七日、即ち「酸漿」の連載が終了した翌日の「万朝報」紙上一面記事である。この記事は貧民救助の慈善事業、伝染病患者の隔離などが「人種改良学」にのっとって行なわれるべきである（人種改良学の応用）ことを説き、「近來我邦に於ても貧富の懸隔益々甚だしく、一方に莫大なる資産を造る者あると共に、他の一方に多数の貧民を生じ、我國民の体格益々劣等に傾きつゝあるとハ未だ何等の方法講ぜらるゝことあらず、是吾人が益々人種改良学を鼓吹するの必要を感じる所以なり」として閉じる。つまり、ここに言う人種改良学とは、国力増強へ向けて「貧民」及び「虚弱者」の増加に歯止めをかけるべく彼らの結婚、出産を制限しよう、という極めて「実践的」な「学」である。この「国力増強」という目標が日露戦争後のナショナリズムによって人々により身近なものとなっていることは言うまでもない。

「屢々論述」していると言うのだから、「万朝報」の「人種改良学」「鼓吹」ぶりをもう一例くらい、確認しておいてもいいだろう。

進化説を人類日用の動植物に應用して、其改良を図るとハ、既に久しき以前より行はれたるが、近來人類にも之を應用して、人種的競争に備へんとすると漸く盛ならんとす

フランシス・ガルトン博士が『ユーゼニックス』と云へる新語を用ひ、社会学の一部として人類本来の性質を發達せしむべき諸般の事物の研究を開始したるハ、僅々六年前の事なり（略）ユーゼニックスハ今仮に之を邦語に訳して人類進化説と稱すべし（略）同説の基礎とする所ハ、單に周囲の情勢を改良することに依りて、精神上及び肉体上人類の改良發達を企図する能はずと云ふに在りて、人類の生理的組織に最大の注意を払ひ、精神上及び肉体上の不具者の増に反対し、正当なる手段に依り総て優者の繁殖を図らんとし、之が為に法律上及び感情上の変動を來すことなく、却て現時の社会組織ハ益々有益に之を保持せんとするものなり。二三

そして、やはり「此有益なる研究」を「一般人士に紹介するハ敢て無益の事にあらざるべし」として新聞読者を「啓蒙」している。この記事のおよそ三ヶ月後（明治四三年六月）日本において初めての「人種改良学」に関する纏まった論考、海野幸徳（「進化学専攻」と記される）による『日

本人種改造論』が上梓されることになる。当書は好評を博したか、翌年には増補改訂版として再版がなされ、そこでは同氏による姉妹書『血統と第二國民之改造』なる近刊予定も立てられている。広告文を読む限り第二國民とは児童を指すらしい。当書購買への誘ひ文句は以下の通り。

著者が「日本人種改造論」を公にするや社会の耳目を聳動し近來の名著也と云ふ世評を得たり。本書は改造論の姉妹書にして通俗に血統上の諸問題を論じ細密に子兒の造成を説き任意に優良なる児童政治家、軍人、学者、商工業者を造成する術を教へたり。（略）^{一四}

出版社側の広告故、誇張は勿論あるが、再版及び姉妹書の刊行が採算の取れる見込みを持つほどの読者を獲得していたことは指摘できる。

海野の著書の刊行期から考えても「万朝報」の「人種改良学」に対する反応は早いものであったと言えよう。その「万朝報」紙上、この時期に「酸漿」が発表されたのは到底偶然と思われない。寧ろ内容から見て「酸漿」は「万朝報」、つまり「人種改良学」を「鼓吹」している発表媒体を意識した作品になっていると考えられるのだ。

それでは、人種改良学と「酸漿」との関わりについて具体的に眺めていくことにしよう。

「人種改良学」とは何か、その問いに比較的早い時期翻訳されたダベンポートの著作（原題「Heredity in Relation to Eugenics」）はこう答えている。「人種改良学とは男女配偶選択の方法を改善して人類種族を優良にするの学なり」。また、「此学の立場は農産改良家の立場と異なることなく、即ち培養薫陶の価値を認めざるにあらざるも、而も永久的の改善は唯、最良なる『血統』を獲得することに依りてのみ達せらるべきを信ずる」ものである。^{一五}人間の出産を農作物の品種改良に比するレトリックも気になるところだが、内容について言及しておけば、「培養薫陶」によつて「改善」をはかるのが当時の「衛生学」にあたる。衛生学の流入によつて逆に人々を戦慄せしめた「細菌」と、「優生学」の關係について市野川容孝は「優生学」は細菌学を真後ろから追いかけるかたちで登場してくる^{一六}、と言ひ、細菌学の限界を埋めるマジックワードとして「遺伝」というタームが機能したことを述べている。つまり、細菌学の研究が進むにつれ、菌に感染しているのに発症しないケースが確認されるようになり、発症には感染以外の要因も考えられるようになる。例えば、

「酸漿」にも登場する肺結核。結核菌に感染していながら発症しない多くのケースをどう理解すればよいのか。先ずは「環境」が考えられようが、それでも得心が行かない部分に「遺伝」が発動するのである。発症の原因に環境を見、その改善に努めるのが「社会衛生学」である。例えば肺結核を発症しやすいのが「衆人密居ノ場」であつたり「貧乏人ノ住居」であつたりすることに注意が向けられ、清潔、殺菌の心得が説かれる^{一八}。しかし、同じ環境にあつて感染し、なおかつ発症しない人間はどうなるのか。つまるところ、発症しやすい体質とそうでない体質があるのではないか。つまり、遺伝体質である。

ここで、当時「確定した事実」として喧伝さる「生物進化説、自然淘汰の論」から見れば優勝劣敗の法則より、発症しやすい体質は何れ滅び行く運命にある、ということになる。それを人工的に助けるのは一寸見には「博愛の精神」のようだが、実は人種の未来を犠牲にすることだ、と説かれる^{一九}。

人工的の手当に依つて僅に生命を保ち得る様な虚弱な者が子を遺せば、之もまた親に似て決して丈夫ではなく、終には団体全部が人工的の保護がなければ、生存の出来ぬ様なものになるかも知れぬが之が即ち所謂退化である。斯かる有様に陥ることを防いで、団体の健康を増進せしめるには如何なる方法を取らねばならぬかと云ふ問題を研究するのが近頃漸く始まつた人種衛生学、社会衛生学の仕事である。^{二〇}

「団体の健康を増進せしめる」にしばしばその妨げとなる者、つまり遺伝学上「虚弱な者」、社会において「劣等な者」、「有害な者」とされるのは主に「癲癇」、「精神病」、「神経病」、「畸形」、「梅毒患者」、「結核患者」、「犯罪者」、「淫売婦」などである。こうした人たちの結婚、出産を制限することで「悪種」を駆逐、「健康」かつ「優良」なる国家を築くことが人種改良学（ユージュゼニックス＝優生学）の目的である。

さて、作品に立ち戻れば、いささか唐突の気味がないでもないが「酸漿」に登場する人物の殆どが人種改良学上断種の対象となりうることを指摘しておきたい。先ずは小銀の朋輩谷江が肺病で入院。小銀の「亡き情人」^{二一}もまた同じ病で亡くなっている。この場合の肺病は咯血というイ

メージのもと、小銀の最期とも重ね合わされ、駆逐の対象であると同時に福田眞人の言う「結核のロマン化」^{二二}がなされていると言える。それは、彼の人の「記念」^{かたみ}が「綺麗な、鬱金の切に包んだ」箸箱に収まっている「真白な」象牙の箸であつたり、「小机」であつたりすることからもうかがえる。つまり、肺病病みに対する清廉で知性的なイメージが喚起される。ただ、彼の人死んでしまっている以上、小銀はその子を産むことは出来ないのであり、作中端々な形で断種が行なわれていると言えよう。

それから、小銀自身。小銀が芸者であることはその名前を始めとして「小棲を浅く」とり、「芸子髷」を結っていること、自らの仕事を「こんな稼業」と称していることなどから知れる。芸者は芸を売るのが生業とはいへ、例えば以下のような記述をつき合わせて見るとどうか。

芸者屋のある所として、待合のない所はない、待合には芸者は附きものである。さうして待合には必ず枕席の備へがあるのである。東京には芸者の数は実に多大なものである。然るに夫れ等の者の中で料理店の御座敷に招かれて、客に芸を売つて生活すると云ふのは、実に寥々たるものである。然らば多くの芸者は何をして居るか、之れは即ち待合といふものがあつて、其の待合と云ふものが彼れ等の生活をする魔窟である。^{二三}

小銀が専ら座敷に招かれる芸者なのか、時に枕席へ待合することもあるのか、作中にはつきりとした記述は見られない。しかしこのことについて考えるとき、小銀の羽織る着物が「白羽二重に薄彩色した朝妻船」であることは如何にも示唆深い。と言うのも朝妻船は古代から近世まで琵琶湖東岸の朝妻と大津を往来した渡船で、船には遊女が同乗したと言う。転じて船の中で客をとる遊女を朝妻と称し、またこれを踏まえ、材とした英一蝶は時の將軍綱吉とその愛妾を風刺。烏帽子、水干姿の白拍子が小舟に乗る絵を描いた。小銀の着物の絵柄もおそらくはこの絵の写しと思われる。白拍子が遊女の別称であり、芸と色を売るものとされていたことはよく知られており、小銀もまた白拍子的であることがこの着物によって暗示されているのではないか。とすれば、白拍子が古くは如何に聖性を帯びた存在であつたとしても、天崖風の視線に射られたとき、小銀は春を鬻ぐ女、「淫売婦」^{二四}になつてしまふのであつて、それは「こんな

稼業をして居ながら、人様の服装みなりの事なんぞ言へた義理ぢやないけれど」
(四八五頁) という小銀の自己認識とも合致する。

最後にその小銀が電車で乗り合わせる老婆だが、彼女は「癩かったいだか何

だか」と言われつつも「べろんと剥げた額」、「赤く爛れた毗めじり」などの表現よりやはりハンセン病をイメージさせるし、「気も何うかをかしいいらし」く「宿場女郎の果」だろう、と語られる。「精神病」者、「淫売婦」が断種の対象たることは既に確認済みだがハンセン病についてはどうか。先述の海野幸徳は断種の対象とすべき「悪質者」を「不具者、病者、罪人」としている^{三四}。この分類からすればハンセン病患者は「病者」にあたる。しかし、欧米経由の「ユウゼニツクス」でハンセン病は断種の候補に挙げられない。が、それはハンセン病患者が「悪質者」に数えられなかったのではなく、欧米では当時既にハンセン病自体が殆ど存在していなかったからである。この事実は日本にも紹介され、例えば「中古欧州ノ癩ハ患者ノ隔離嚴重ニ行ナハレタルニヨリ、今ヤ其ノ中部及ビ西部ニ於テハ幾ド全ク其ノ跡ヲ絶チタリ(略)嚴重ノ患者隔離方最有効ノ予防法タルヤ論ナシ」^{三五}といった風に語られる。欧米という「外部の鏡」^{三六}に自らを映し出すことでハンセン病対策へ乗り出した明治政府の姿勢を山本俊一は「日露戦争に勝つて世界の一流国に仲間入りした日本としては、欧米でははるか以前に根絶されたハンセン病がなお国内に存在することに恥辱を感じ、戦争が終ると政府はただちに法制定にふみきろうとした」^{三七}のだと指摘する。明治政府が乗り出したその法対策が所謂「法律第十一号」(明治四〇年三月発布)である。ハンセン病に対する当時の意識がうかがわれるので、以下第三条まで挙げてみる。

第一條 医師癩患者ヲ診断シタルトキハ患者及家人ニ消毒其ノ他予防方

法ヲ指示シ且三日以内ニ行政官庁二届出ヘシ其ノ転帰ノ場合及死体ヲ検案シタルトキ亦同シ

第二條 癩患者アル家又ハ癩病毒ニ汚染シタル家ニ於テハ医師又当該吏

員ノ指示ニ従ヒ消毒其ノ他予防方法ヲ行フヘシ

第三條 癩患者ニシテ療養ノ途ヲ有セス且救護者ナキモノハ行政官庁ニ

於テ命令ノ定ムル所ニ從ヒ療養所ニ入ラシメ之ヲ救護スヘシ但シ適当ト認ムルトキハ扶養義務者ヲシテ患者ヲ引取ラシムヘシ必要ノ場合ニ於テハ行政官庁ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ前項患者ノ同伴者又ハ同居者ニ對シテモ一時相当ノ救護アルヘシ
前二項ノ場合ニ於テ行政官庁ハ必要ト認ムルトキハ市町村長(市制町村制ヲ施行セザル地ニ在リテハ市町村長ニ準スヘキ者)ヲシテ癩患者及其ノ同伴者又同居者ヲ一時救護セシムルコトヲ得^{三八}

ハンセン病の「行政官庁」による予防、監護を目的としていることが知られる。直接その任に当たったのが内務省衛生局であることよりハンセン病を監督することが国営に携わることでもあったと分かるだろう。また、条文中の対処法からハンセン病を伝染病として認知していることも分かる。ハンセン病が古くは遺伝病と考えられていたことは良く知られており、政府によって伝染病と認定された後も、一般社会では依然、遺伝病と考える向きが根強かったことについては、山本、武田の述べるところである。ここでは、結核の例と同様、細菌による伝染説を経てさらに遺伝が発動している例を確認しておこう。因みにこれは昭和に入ってから記述であり、明治末年での一般社会でのハンセン病に対する知識については推して知るべし、である。

癩病は古くから天刑病と称へ最も人の嫌がる病氣である。この病人の出た家では癩病系などといはれ、世間の人と交際もできないやうな氣の毒な運命に墜ちるのである。然しこの病氣も結核と同様、癩病の作用によつて起るのであるから、勿論伝染病であつて遺伝ではない。然らば癩病の出た家系の人々はこれに冒され易い素質をもつてゐるか或はその素質が遺伝するかといふに、まだ学問的に調査されてゐないから何ともいふことはできない。ただ世間往々にして祖先に該病患者があつた場合その子孫にも発現したといふ例は少くないから、結核に罹り易い素質や精神的特質が遺伝するやうに癩病に罹り易い素質が遺伝するのであらうと想像されるから、なるべく健康な人と結婚するやうにせなければなるまい。^{三九}

諸書において結核とハンセン病がセットにして語られることも何やら作品と因縁めくが、過去、ハンセン病は伝染病と遺伝病が重なる地点に存在していたらしいことを確認して「老婆」とゴム酸漿の問題に眼を向

けてみよう。

否、確に口へ入つたに違ひないの。だつて、真赤な其が、ゴム酸漿

と一目見るなり、はつと思つた時、お汁が舌へ触つてき、……其ツ

切、酸漿の形がまるつきり見えないぢやないか。(四八九頁)

右は車中の老婆を逃れて下車した小銀が、鹽を借りた蕎麦屋で蕎麦を食べようとしたときのことを自身回想したものである。ゴム酸漿は蕎麦の中でちらと目撃されるのみで、後は「まるつきり見え」ない。「お蕎麦を一筋づゝと思ふほど、箸を入れて探したけれど酸漿の影もない」。こうした語りは、そもそもゴム酸漿は無かつたのではないかという疑いを生じさせるものになっているが、小銀自身はそれを疑わない。蕎麦の中にゴム酸漿が浮いていたという状況そのものと重ね合わせても、これは小銀のみにしか通用しない光景として記述されているように思われる。勿論、作品世界に経験的現実世界の尺度(「普通」、蕎麦の中にゴム酸漿が浮かんでいる状況は殆ど考えられない)をそのまま持ち込むことはできない。しかし、その作品がどの程度経験的現実世界を意識して構成されているかは判断できる。作品が高度に「現実」世界を撰取して構成されているながら、ある一部分でその「現実」を抜け出ている場合、その部分はどう理解されるか。この問題を広く考えるには、「現実」世界をどう定義し、どの範囲にまで適用するかなど考えなくてはならないが、「酸漿」の場合、「赤十字病院」と「三の橋」との位置関係^{三〇}などからも知れるように、かなり作品外の現実を取り込んだ設定が取られていると言える。話も始めは作品外の「日常性」を揺さぶることなく展開していくが、先ほどから問題にしている個所、注文した蕎麦にゴム酸漿が入っていた、という辺りからそれが変化していく。そして、小銀による一人称の回想は、彼女にはそう見えた、という色彩を強める。つまり、「小銀のみにしか通用しない光景」Ⅱ「幻想」である。ここで、小銀の「幻想」を領きながら聞いているお辻の存在が気になるが、「真鍮の嗽茶碗」に吐かれた

「鮮血」を小銀が酸漿の溶けたものと言ふのに対し、お辻はそれを血

と認めて医者に使いを出している。この点から考えると、箸で撫でてみよう、という彼女の提案は小銀に酸漿などは始めから無かつたのだとい

うことを納得させるためであつたと考えられ、小銀の「幻想」を共有しようとしていたわけではないと考えられる。お辻が、小銀の話を聞きながら否定するわけではないが「遺瀨のない顔」を見せることからこのことはうかがえる。よつて「酸漿」の場合、蕎麦の中にゴム酸漿が浮かんでいたという「非—現実」的な小銀の主張は彼女の「幻想」としてテクスト内でも「日常」に回収される。この点に関してはもう一展開あると考えるが、それは後述のこととして、次なる問い、小銀の「幻想」を我々はどう読めるか、に移ろう。小銀が酸漿に拘るのは言うまでも無く、ハンセン病を患っているらしい老婆がそれを鳴らしていたからである。小銀が「毛私や一生ゴム酸漿は持つまいと思ふ」のは、老婆に対する悪感情がそれに集約されているからであり、また小銀はゴム酸漿を老婆の病の感染媒体として恐れている。勿論酸漿がハンセン病の感染媒体になり得るはずはないのだが、例えば「癩八難病ニシテ治法シラズ」^{三一}といった状況にあるとき対処不可能な病に対する恐怖が忌避できる「形」を求めることは考えられる。先に見たような「遺伝」としての「癩病系」を作ること、つまりその家系の者と交じらないことで病を忌避しようとするなどとはそれだが、ここではその求められる「形」が酸漿として発露していると思われる。酸漿が墮胎を象徴することは二節で述べたておいたが、小銀の恐れる酸漿、つまり老婆の鳴らす酸漿は墮胎と感染、二つの恐怖を示したものと見ることができ。

ところで実際のところ、ハンセン病に対する対処法は先の条令で確認した通り、殆ど「隔離」という形しか取り得なかつた。そして、その隔離施設において、患者の断種手術が日常的に行なわれたことは良く知られている。藤野豊は『日本ファシズムと医療』において、ハンセン病患者の療養施設(藤野はそれが殆ど「収容所」であつたと言うが)全生病院では、院長光田健輔によつて既に一九一五年、半強制的な断種手術が行なわれていたことを報告し、ハンセン病に感染しやすい体質が遺伝するなど当時流布していた学説を踏まえた上で「ハンセン病自体は遺伝病ではないにしても、それに類似した形で、母子、もしくは父子感染していく危険性を内在させているとみなされるわけであり、ハンセン病は優生主義の対象に組みこまれうる」^{三二}と述べる。

ハンセン病が伝染と遺伝の重なる地点に存在していたことは先にも述べた。こうした「現実」を拾っていくと、小銀が忌んでいるゴム酸漿を

箸で突こうとする行為は感染媒体の破壊と同時に「断種—堕胎」を隠喩しているものとして読める。勿論、堕胎罪が存在していたことを考えても、堕胎と断種の違いは大きい。一方は違法行為であり、発覚すれば有罪となる。しかし、優生思想の流れの中で両者が同じ線上にあったことを示すのもまた容易なのである。

遺伝的病患を有する人の胎児は、たとひ分娩されたりとするも遺伝を継続するか、病弱であるか、又は早世することによつて、社会的に低格者であると云ふことは今日科学的に証明されて居ることである。かかる場合優生学的適応症として医師の科学的思慮及びその手術領域に於て堕胎せらるることは、他面国民の組織力を高め、妊娠力を強め、人口の減退を防ぎ、質的薄弱より来る人口の量的損耗を防ぎて均衡を保たしむるものではなからうか。低格分子の出生防止は、それは即ち健全なる社会分子の増加であることを考へなくてはならぬ。

学問上特定の低格者が生まるることの明かなる場合に於てこれを阻止すると云ふことに就ては婚姻禁止、断種乃至去勢と堕胎は毫も差異はないのである、唯堕胎がこれ等の方法と異なるのは妊娠して居ると云ふ一点である。^{三三}

「酸漿」との関わりを考えるならば当然年代的な隔たりが考慮されねばならない。しかし、ここで言いたいことは人種改良学の提唱する断種・絶産法はその道を進む限り堕胎へと繋がっていく^{三四}ものだということなのである。

ユースニックス

「人種改良学」という歴史的出来事。「酸漿」をその「神話的表象」として読む試みは以上のようなものである。鏡花が衛生問題に敏感であったことは伝説化された作家個人の性癖を持ち出すまでもなく、「高野聖」における若き日の宗朝が水を飲むことを逡巡するくだりなどを思い起こせば十分だろう。そうした眼差しを持つ作家はこの問題に早いうちから反応していたのではないだろうか。

「酸漿」は、自身「悪質者」とされかねない女がさらなる「悪質」の種に脅かされ、それを断とうとする物語である。それは明らかに小銀の一人相撲なのだが、それが少しも滑稽ではなく、寧ろ鏡花風に言うなら

ば「慄然とする」のは、「鮮血」を吐いてなお「嬉しい、半分溶けて、ぶ

よくしてね。」「あゝ嬉しい、酸漿が出るんだねえ」と恍惚する小銀の姿が忌まわしいものとして映るからだろう。自らの体内／胎内に潜む「悪種」の駆逐に恍惚とする小銀の姿はそれを眺める者の日常性を揺さぶる。つまり、小銀の思い込みは「幻想」として日常性に回収されても、その「幻想」を生きる小銀の存在が日常性を揺るがすのだ。また、小銀の思い込みがまさに思い込みとして、恐怖が「幻想」に対する恐怖として描かれているところに、この作品と実際の人種改良学との距離を見ることができよう。

なお、作品冒頭に記される「赤十字病院」について人種改良学との関わりから蛇足めいたことを付け加えておけば、先述の海野はその著書において以下のように記す。

吾人日本人にして、若し生存競争の舞台に於て雄を世界に称し、高祖の宏業を辱しめざらむとせば、国家心以外に他の競争的武器を有せざるべからず。然るに学者の冷淡にして、国民の無智なる、無益の消極的慈善に耽り、不具者と病者と罪人とを救助し、国を挙げて漸次不具者、病者、罪人の団体たらしめむとす。(略)遂には社会の衰敗となり、国家の潰滅となるべし。之れを防止する方法を案出せずして可ならむや。予の本書を公にするは之の需要に応ぜむが為なり。^{三五}

または、

悪質者と雖も慈愛すべき同胞たるは無論なり。之れを排して顧みざるは、一つに社会を顧み、国家を思ひ、人類の幸福を希へばなり。悪質者を排するに敢て残酷なる方法を要せず。単にその蕃殖を防止すれば足るに於てをや。予を以て残酷となす勿れ。止むをえざるものあれば也。悪質者の増加は否定すべからざることにして現下の状態は「雑草は有用植物を掩圧す。雑草は有用植物よりも急速に増加して之れを窒息枯死せしむ」と云ふにあり。^{三六}

全ては国家、社会のため。人種改良学の勃興が日露戦争後のナショナリズムをその背景に持つていることについては既に述べておいた。これを踏まえればやはり小銀が老婆に出会うのは、何としても「赤十字病院」

の帰りでなくてはならない。日本赤十字社は現在も名誉総裁を皇族が勤めていることから分かるように、皇室との関係、浅からぬものがあるが、その日本赤十字社（当時はまだ改称前の博愛社。日本赤十字社に改名するのは翌明治二〇年）によって明治一九年、麹町区に建設されたのが日本赤十字病院である。この病院の当時のとらえられ方は「帝室の恩賜日本赤十字社病院は日本首府の一大偉観たり」^{三七}という言い方に詳しいだろう。

さて最後に、本論始め、「酸漿」という作品は鏡花という作家の作品を眺める際に新しい視点をもたらす、と述べた。しかしそれについては、これまでの鏡花研究では「母胎回帰願望」が取りざたされてきたものの、母胎に回帰すれば即ち安住の地があるというわけではなく、そこでは「墮胎」というまた新たな恐怖が生ずるのだということ、そしてそのことについても鏡花は様々なところで書いているのだ、と言うに留め、後はまた他の作品群と交通させながらの別稿に譲りたい。

一 「万朝報」第六二六〇〜六二六三号（明治四四年一月三日〜六日）。

初出と全集では表記の異同において他に目立った変化は見られない。よって本稿の引用等は『鏡花全集卷十三』（岩波書店、昭和一六年六月）に拠るものとする。初出―全集間の詳しい異同については【資料】参照のこと。なお、本稿において旧漢字は新漢字に改めた。

二 須永朝彦編『日本幻想文学全景』（新書館、一九九八年一月）。

三 泉鏡花「星女郎」（明治四一年一月「文芸倶楽部」第一四卷第一五号）。

四 泉鏡花「尼ヶ紅」（明治四二年二・四月「新小説」第一四年第二・四卷）。

五 「三田文学」第二卷第一号（明治四四年一月）。

六 平出鏗二郎『東京風俗志下巻』（富山房、明治三五年八月）↓『明治文化資料叢書第11巻世相編』（風間書房、昭和三五年一〇月）。引用は後者より。

七 電車が他者との新たな出会いの場となることに鏡花が意識的であったことは、「高野聖」（明治三三年二月「新小説」第五年第三巻）を始めとする諸作品よりうかがわれる。

八 ゴム、ということより本論の内容を鑑み、避妊具との関わりを考えて

いるが未だ調査中である。

九 酸漿は古く「アカカガチ」と呼ばれ、「古事記」ではヤマタノオロチの瞳の色を示すのにその言葉が使われている。

一〇 作中、心持の悪さを表す小銀の「蛇を飲んだほどな思ひ」という言葉があり、即座に「尼ヶ紅」（「新小説」第十四年第二・四巻、明治四二年二・四月）を思い起こさせる。「尼ヶ紅」にも「産」を巡る恐怖感が表出していると思われるが、「蛇」と「産」の間に鏡花は特別な関係を見ていたのだろうか。「蛇」が「死と再生」を象徴するという一般論を踏まえながらより鏡花の視点に即した形で調べてみたい問題である。

二 『日本民俗文化大系（普及版）第一〇巻 家と女性』暮しの文化史Ⅱ（小学館、一九九五年七月）四三二頁。

三 『国史大系第一巻上日本書紀前編』（吉川弘文館、昭和四一年一二月）一六六頁。

四 「万朝報」第五九七八号（明治四三年三月二七日）。

五 海野幸徳『訂正増補改訂日本人種改造論』（富山房、明治四四年六月）。

六 「人種改良学」（大日本文明協会、大正三年一月）一頁。

七 市野川は旧来、「民族衛生学」とされてきたRassenhygieneを「人種衛生学」と訳し、「優生学」（Eugenik）と殆ど変わりない、と言う。「人種衛生学」が既に明治三八年時点で日本でも知られていたことは注一七参照のこと。

八 米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会』（講談社現代新書、二〇〇〇年七月）五九頁。市野川が言うのはドイツにおける優生学の歴史だが、日本の近代医学がドイツに範をとったことを考えてみても示唆的だ。

九 宮入慶之助『衛生学下巻』（南山堂書店、大正三年十月）。但し、大正一五年九月発行の第二版を参照。

一〇 丘浅次郎『増補進化と人生』（東京開成館、大正一〇年九月／初版明治三九年六月）中、「進化論と衛生」（明治三八年六月国家医学会にて講演）より。

一一 同書同章、三一七頁。

一二 福田眞人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、一九九五年二月）。

一三 石川天崖『東京学』（育成会、明治四二年六月）↓『明治文化資料叢書第11巻世相編』（風間書房、昭和三五年一〇月）。引用は後者より。

一四 引用部分は同書、目次では「第二十四章花柳社会の一斑」中、「芸妓

の多数は売春婦なり」の項にある。

二四 海野前掲書、二頁。

二五 宮入前掲書、二五四頁。

二六 武田徹『隔離』という病い（講談社、一九九七年七月）二二頁。

二七 山本俊一『日本らしい史』（東京大学出版会、一九九三年一月）三九頁。

二八 同書、資料編より。

二九 神谷辰三郎『人生遺伝学』（養賢堂、昭和三年一〇月）二五三～二五四頁。

三〇 「新電車案内図」（忠誠堂、明治四五年九月）によれば「三の橋」は

「赤十字病院下」より六つ目の停車場にあたる。因みにこの地図によれば「病院下から、四つ目あたりの橋の所」（四八七頁）は「四の橋」になる。

三一 宮入前掲書、二五二頁。

三二 藤野豊『日本ファシズムと医療』（岩波書店、一九九三年一月）三四頁。

三三 小泉英一『堕胎罪研究』（巖松堂書店、昭和九年一月）二〇九頁、

二二八頁。

三四 実際、一九四〇年衆議院に提出された「癩予防法改正案」では、ハ
ンセン病患者の断種手術と妊娠中絶を認める内容の文言がおりこまれて
いる。（藤野前掲書、二四五頁）

三五 海野前掲書、二～三頁。

三六 同書、一四八頁。

三七 林太四郎筆「日本赤十字社歴史画談」（日本赤十字社、明治三五年）

↓『日本の赤十字』（日本赤十字社、昭和三〇年一月）。引用は後者に
拠る。

【資料】「酸漿」校異

「酸漿」の初出（『万朝報』第六二六〇～六二六三号、明治四四年一月三日（六日）と定本（『鏡花全集巻十三』岩波書店、昭和一六年六月）に於ける校異表を付す。なお、校異表の形式は岩波版全集月報所載の村松定孝「鏡花小説校異考」を参照した。

定本頁数	行数	定本	初出
▽四八〇	二	のはなかつた	↑ のハなかつた （以下「は」「ば」の記述はこれにならう。但し全集四八八頁一行「ばかり」、同四九〇頁一五行「はじめて」には異同なし）
▽四八〇	四	身体	↑ 身体（以下「體」の記述はこれにならう）
▽四八〇	五	出迎	↑ 出迎
▽四八〇	八	コオト	↑ コート
▽四八〇	九	立てて	↑ たてゝ（以下疊字になる場合の記述はこれにならう）
▽四八一	三	褪せた唇の色に、	↑ 褪せる唇の色に。
▽四八一	五	お炬燵	↑ お炬燵（以下これにならう）
▽四八一	六	ますえ	↑ ます、え
▽四八一	一	云つて、	↑ 云つて。
▽四八一	一	なくてさ	↑ なくつてさ
▽四八一	一	染々	↑ 染染
▽四八二	一	世帯	↑ 所帯
▽四八二	八	でせう	↑ でしやう
▽四八三	四	実體	↑ 実体
▽四八三	八	谷江	↑ 民代
▽四八三	八	いらつしやい	↑ 居らつしやい
▽四八三	一四	行らしやら	↑ 行しやら

▽四八四	一二	一寸、	↑	一寸
▽四八四	一三	止さう	↑	よさう
▽四八五	四	洗ひ晒した	↑	洗晒した
▽四八五	五	白い	↑	白の
▽四八五	五	めめない	↑	締めない
▽四八五	五	綿ネル	↑	綿子ル
▽四八五	七	もやく	↑	もやくと
▽四八五	八	すくく、毛の先	↑	すらく、毛が前
▽四八五	九	そして	↑	而して
▽四八五	九	赤く爛れた	↑	赤くに爛れた
▽四八五	一	白歯だらう	↑	白歯ふらう
▽四八六	四	ごりく	↑	ごりくと
▽四八六	五	カチく	↑	カチカチ(以下これにならう)
▽四八六	八	肝の蟲	↑	肝の虫
▽四八六	八	鬼灯だらう	↑	鬼灯
▽四八六	一〇	右のね	↑	右のをわ
▽四八六	一〇	はじめよう	↑	はじめやう
▽四八七	一〇	それは	↑	そりや
▽四八七	五	お辻。	↑	お辻、
▽四八七	七	まあ。	↑	まあ、
▽四八七	八	一つ	↑	一ツ
▽四八七	一	成つて	↑	成つた
▽四八七	二	病院下から、	↑	病院下から
▽四八七	五	なくつちや	↑	なくツちや
▽四八七	五	辛抱出来ない	↑	辛抱ができない
▽四八七	五	入つたの、	↑	入つたの。
▽四八八	八	唯モ	↑	唯も
▽四八八	一〇	恥かしい	↑	恥しい
▽四八八	一三	と歎息	↑	と云つて
▽四八八	四	見るなり、はつと	↑	見るから、はつと
▽四八九	一	やうに、	↑	やうな
▽四九〇	一	までに見せた	↑	まで示した
▽四九〇	六	むつくり	↑	むくり
▽四九〇	六	動いたと	↑	動いた、と

▽四九〇	七	お記念	↑	お記念
▽四九〇	一〇	たてて	↑	たてる
▽四九〇	一	お父さんは	↑	お父さんハ、
▽四九〇	一五	鬱金	↑	鬱紺
▽四九一	一	色に、	↑	色に
▽四九一	四	どつしり	↑	どつしりと
▽四九一	六	当てる	↑	当てる
▽四九一	一四	ひよろり	↑	ひよろりと